

## 【セッション C-P11】

### Gボールを使用した体育の教材に関する研究 - 小学校低学年における授業実践の調査から -

鞠子佳香（女子栄養大学）

【体操コード】1002

【キーワード】Gボール 小学校低学年 教材

#### 【目的】

文部科学省は2008年3月に新しい学習指導要領を公示した。小学校の新学習指導要領では、第1学年から体づくり運動が位置づけられることとなり、第1学年及び第2学年では「多様な動きをつくる運動遊びでは、体のバランスをとったり、移動をしたりするとともに、用具の操作などをする。」<sup>1)</sup>と明記されている。

Gボールは用具の持つ特性からこの学習目標と運動内容に非常に適していると思われる。筆者は平成17年より小学校でのGボール授業調査を実施しており、高学年での「体づくり運動単元」では非常に高い授業評価が得られた。本研究では、小学校低学年において授業実践による調査を行うことでGボールの教材としての有用性を明らかにし基礎的な知見を得ることを目的とする。

#### 【方法】

##### (1) 調査日及び対象授業クラス

平成20年2月7日～28日。東京都H市立A小学校2年1組、2組（男女71名）。基本の運動「用具の操作（4時間単元）」で実施した。

##### (2) 調査項目

単元前後授業評価：体育の授業に対する状況把握と成果把握を比較検討し、授業計画や授業改善のための情報を得る目的で児童を対象に行う質問紙法による調査。4因子8項目で構成し、質問項目について「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として集計した。

形成的授業評価：単元時の各授業に対する実態を把握し、授業の成果および評価についての情報を得る目的で児童を対象に行う質問紙法による調査。4因子9項目で構成し、質問項目について「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として集計した。

バランス持続時間と落下時の着地回数の変容：単元中の児童のGボール運動技能の変容を調べるために、Gボールの上に座位姿勢で両足を上げてバランスをとる運動の持続時間の変化について測定した。測定は30秒を上限として行い、ビデオ撮影法で行った。

クラス担任によるGボール授業のアンケート：単元終了後2名のクラス担任から見たGボール単元の授業における児童の興味関心・上達度、教材活用度、クラスの様子について自由記述式によるアンケートを実施した。

#### 【結果および考察】

##### (1) 小学校低学年Gボール単元の内容について

小学校2年生「基本の運動（用具の操作）」単元での実施ということ、調査対象学年の体育年間目標が「基本的な運動の習得と体力の向上」とされていることを考慮し、本調査では児童自身が大きい用具とのかかわりの中で、用具の持つ特性を味わいながら全身的な運動を行い、Gボール運動の基本動作を体得することをねらいとした。運動は難易度の低いものから高いものへと児童が安全に課題を持って取り組みやすいよう構成した。（例：「ボールを転がす（ゴロゴロキャッチボール）」 「ボールではずむ（Gボールリズム体操）」 「ボールにのる（30秒おしりバランス）」 「ボールの上をころがる（ボールローリング）」）

##### (2) 単元前後授業評価について

図1に示されたように「楽しむ」：2.88 2.95 「学ぶ」：2.35 1.91 「できる」：2.51 2.77 「守る」2.79 2.89 「総合」2.63 2.63 となった。

「楽しむ」「できる」「守る」の項目において単元前より単元後に高い数値が得られ、児童はGボールの単元を楽しく、運動の成果を自ら感じ、ルールを守って授業を行っていたことがわかる。また、「学ぶ」の項目で低い評価だったのは、質問項目が「他の時間に練習しますか。」という内容であり、授業以外にGボールに触れる機会がなかったためにこのような結果になったと考えられる。「総合」で単元前後同様の値だったことからGボール単元は他の単元と同様に児童にとって評価の高い単元であったことが考察された。

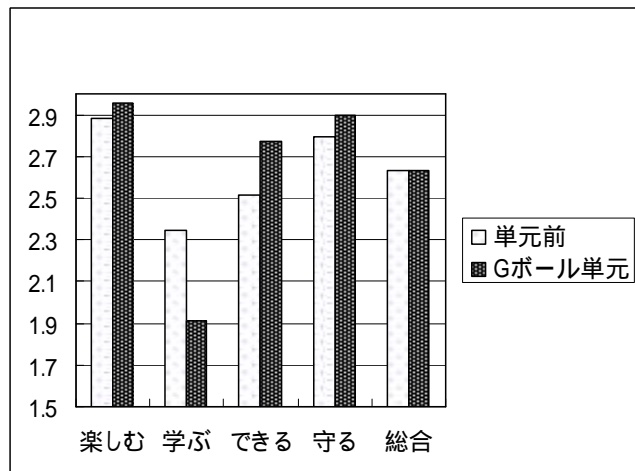


図1 単元前後授業評価

### (3) 形成的授業評価について

図2に示されたように各授業の評価は高い結果となった。各因子を合計して算出した「総合」の値から、授業が進むに連れて評価が上がっていく傾向が見られた。「協力」の因子がその他の因子に比べて数値が低かったのは、授業の中で自ら取り組む運動内容が多かったことが考えられる。低学年のGボール単元であったので、まずは大きな用具とのかかわりの中で全身を使って

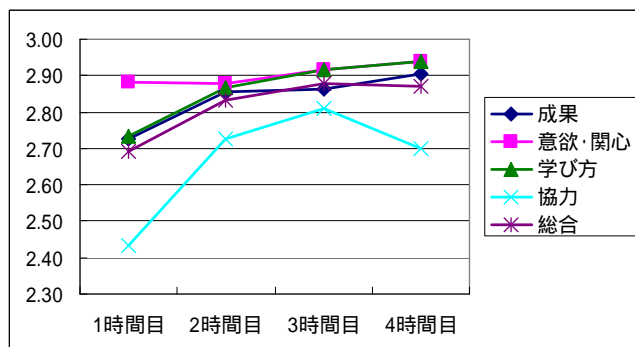


図2 形成的授業評価

たくさんの動きを体得してほしいというねらいもあり、一人で取り組むバランスやバウンドの運動を多くとり入れたことが、結果となったのではないかと考えられる。

### (3) バランス持続時間と落下時の着地回数の変容について

バランス持続時間は12(±10.2)秒から21.33(±9.2)秒に伸びた。同様に30秒間の着地回数を計測したところ5.20(±3.41)回から1.17(±1.70)回へ減少した。4回の授業の中で多くの児童が、Gボールの座位バランスがとれるようになった。授業時間以外にボールに触れる機会はなかったが、授業の中で自らすすんで意欲的に課題に取り組んでいたことが考察される。

### (4) クラス担任によるGボール授業のアンケートについて

授業で取り入れた運動内容については、「30秒おしりバランスの課題は児童の興味関心が高く、楽しそうに真剣に挑戦している姿がみられた。」「音楽に合わせたGボールリズム体操では体をスイングさせる楽しさを味わえる特有な用具であると感じた。」「ローリング運動は、能力的に難しい子には高レベルかと思うが、児童はボールになじむのが早いと感じた。」などの意見があった。

小学校低学年の体育の教材としては、管理・安全面で「(ボールを膨らませた状態では)保管に場所を要することが問題点かと思う。」「ボールの大きさは低学年に55センチであったと思う。」「事前にしっかりとしたきまりや約束が必要だと思った。」「体力・運動能力面、授業活用については「運動の苦手な子も得意な子も無意識に能力を高められることのできる運動であり、体全体を使うこともできるので低学年に適した教材だと思う。」「今後授業のバランス感覚やリズム感を育てる教材として基本の運動で活用したい。」また、クラスの様子についても「教室でイスに座って習った運動を遊びながら行っていた。」「毎回Gボールの授業を楽しみにしていた。」という意見があり、今後、小学校現場で教材として定着させていくためにはいくつかの課題が見られるが、今回の授業実践ではGボールの授業は肯定的な評価が得られたことが結果から読み取れる。

### 【参考文献】

1) 文部科学省：[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/tai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/tai.htm).2008